

「あっち」と「こっち」

大島 ^{としみ} 寿美

「あっち」側から、「こっち」を見る。

「あっち」の方から、「こっち」を考える。

言葉で言うのは簡単ですが、実際にはなかなか難しいものです。

スポーツの試合だとかで、ひいきして見ている選手やチームを「こっち」としたら、敵にあたる相手側が「あっち」となります。その「あっち」の側から「こっち」がどう見えているのか？これを無理やりにでも想像して「乗り換える」んです。しょっちゅう練習していないとなかなかできません。それでも、少しでも「その気」になれば大成功です。

世の中、あらゆる場面で「あっち」と「こっち」があります。例えば「ガイジン」というのは、「あっち」です。男にとって、女は「あっち」です。企業にとっては競合他社が「あっち」だったりします。この世にとって、死後の世界は「あっち」です。ある考え方にとって、反対の考えは「あっち」です。

その「あっち」側から、「こっち」へ視線を送ってみる。なかなかできないけれど、練習してみる。しょっちゅう練習してみる。これをしていると、「あっち」と「こっち」の間にあったはずの明確な境界線が、瞬間、見えなくなってしまったりします。ここに、なにか大きなヒントがあると思うんです。

敵と味方、相容れない二者じゃなくても、「あっち」と「こっち」の分け方はあります。

東北の被災地や、福島のことなども、「あっち」として考えていることが多いかもしれない。しかし、その場を、その状況を「こっち」としてとらえている人たちもいる。

「そっち」(被災)側の「こっち」からの目玉で、もともとの「こっち」を見てみたら、随分違って見えてくると思うんです。

ボクが、そういうことをうまくできているかと言えば、正直言って、できているとは言い難い……。でも「練習」は欠かさないでいるようにしています。

この度、札幌南高校(あっち)から、岩見沢東高校(こっち)へ転勤して来ました。「こっち」でしっかり頑張ろうと思います。よろしくお願いします。

4月から新しく顧問に加わった大島先生が2年生の学年通信にお寄せになった文章を読むと、それはそっくりそのまま岩東テニス部員に贈られたメッセージでもあった。自分は「こっち」、対戦相手は「あっち」。自分は「こっち」、ダブルスを組むペアは「あっち」。自分は「こっち」、練習のラリーでボールを打ち合っている相手は「あっち」……「そっち」側の「こっち」からの目玉で、もともとの「こっち」を見てみたら、随分違って見えてくる…… (佐々木)